

# 2<sup>nd</sup> 実務研究論文の書き方

地域活性学会 実務研究論文の書き方教室

県立広島大学 西川洋行

2022.5.14 @Online Session

# 自己紹介

## 西川 洋行(にしかわ ひろゆき)

- ・ 1968年 和歌山県生まれ
- ・ 1997年 東京大学大学院博士課程(理学系化学専攻)修了後  
京セラ(株)入社(研究開発・技術職)
- ・ 1997～2005年 京セラ(株)研究開発部門にて  
電子部品・デバイスの研究開発に従事
- ・ 2005年 九州大学知的財産本部(産学連携)
- ・ 2007年 大分大学地域共同研究センター・准教授
- ・ 2012年 県立広島大学地域連携センター・准教授

地域活性学会理事、論文誌編集委員会副委員長

# 本日の講義の内容

- (1) はじめに; 地域活性学会と地域活性研究誌
- (2) 実務研究とは; 実務研究と地域活性学
- (3) 実務研究論文の「狙い」と「構成」
- (4) 学術研究論文との違い
- (5) 学術研究ノートと事例報告
- (6) 査読基準; 審査で何を評価しているのか
- (7) 実務研究論文の持つ意義; ナレッジマネジメント

# はじめに

## ・ 地域活性学会

⇒ 「地域再生ないし地域の活性化に関心を持つ全国各地の大学研究者のほか、国や地方自治体の職員、NPO、産業界からも多彩なメンバー」が「準備会を結成し、幾度か議論を重ね」て「創設」

「私たちに、従来ある地域経済の活性化関連の学術活動では疲弊した地域への原因を追究するのみで、その後の解決策を提示するという活動が希薄であるという共通認識があります。そのため、本学会では学術研究者の分析とともに地域で実際活動をおこなっている種々民間団体、さらに制度・予算の面で支援する行政主体の参加も募り、より実践的な政策提言・地域活性化の取組支援につながる学術研究活動を目指す所存です。」

\*「」内は、学会設立趣意書より引用

## ・ 地域活性研究誌

「学術研究者の分析」と「より実践的な政策提言・地域活性化の取組支援」



⇒ 実践的な研究活動を扱う「実務研究論文」の創設

⇒ 論文誌を「学術研究論文」と「実務研究論文」の2本柱で構成

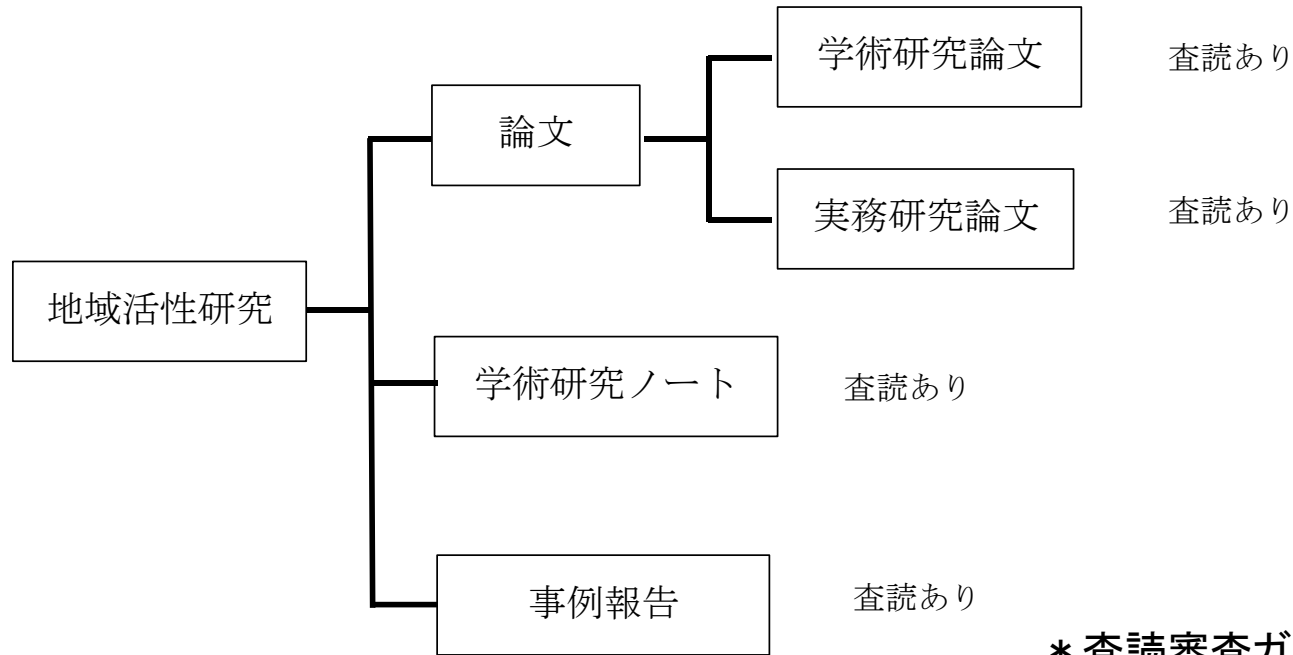
# 実務研究とは

## ・ 学術研究との比較

	実務研究	学術研究
研究の目的	施策・解決策の考案・提示	新しい知見・知識の発見
研究のテーマ	取組み紹介 事例分析 暗黙知の発見	従来研究との比較 データ取得・分析 知識創出と位置づけ
評価する視点	取組みの特徴・利点 目的(=目の付け所) 実現方法・手段	論点の選び方 学術的意義(新しさ) 普遍性・正確性
目標・目的	課題解決の手法 社会的・経済的効果 実務手法・実施体制の解明と構築	新たな普遍的知見 学問体系の進歩・深化 研究手法の進歩と、学術的知見の深化
評価の観点	実際に(実務家が)使えるかどうか 他事例への応用可能性	結果(知見)の正しさ・正確さ 知見の普遍性・明確さ 学問体系における整合性

# 実務研究とは

## 地域活性研究誌の新投稿区分



\* 査読審査ガイドラインより

- ・ 論文を2区分(学術と実務)で構成、実務事例を扱う区分を新設
- ・ 事例報告に査読を導入、4区分全てが査読付き投稿
- ・ 学研究ノートと事例報告を、論文化へのステップに位置づけ

## ・実務研究論文

現実的・実践的な手法や解決策等に主たる関心を示すもの

研究対象となる事象や取り組み等を現実的・実践的に実行し、達成し、又は解決を図る手法や方策等を主に実務的視点から記述するもの。

事象や取り組み等の記述に加え、同様の事象や取り組み等を再現・実施するために必要な、十分な説明・記述がなされていることが望ましい。

## ・学術研究論文

学術的な新規性に主たる関心を示すもの

研究対象となる事象や取り組み等を、学問的背景や知見に基づき学術的に解明するものであり、学術的に新たな知見を明示する論考を含み、一般的、普遍的な理解や論理構成を有するもの。論旨が一貫し、学術的成果として一定の結論を得る段階に至っていることが望ましい。

## ・事例報告

新規性が高く速報する価値のある事象や取り組み等を詳述し紹介するもの

研究対象となる事象や取り組み等について、詳細に説明・記述したものであり、事象や取り組み等の記録・紹介・応用等を目的としたもの。実務研究論文に求められる。

詳しい分析、考察は必要なく、事例の詳述度合いや新規性、また速報性を重視する。

## ・学術研究ノート

学術研究の萌芽段階・途中段階にあって重要な知見を扱うもの

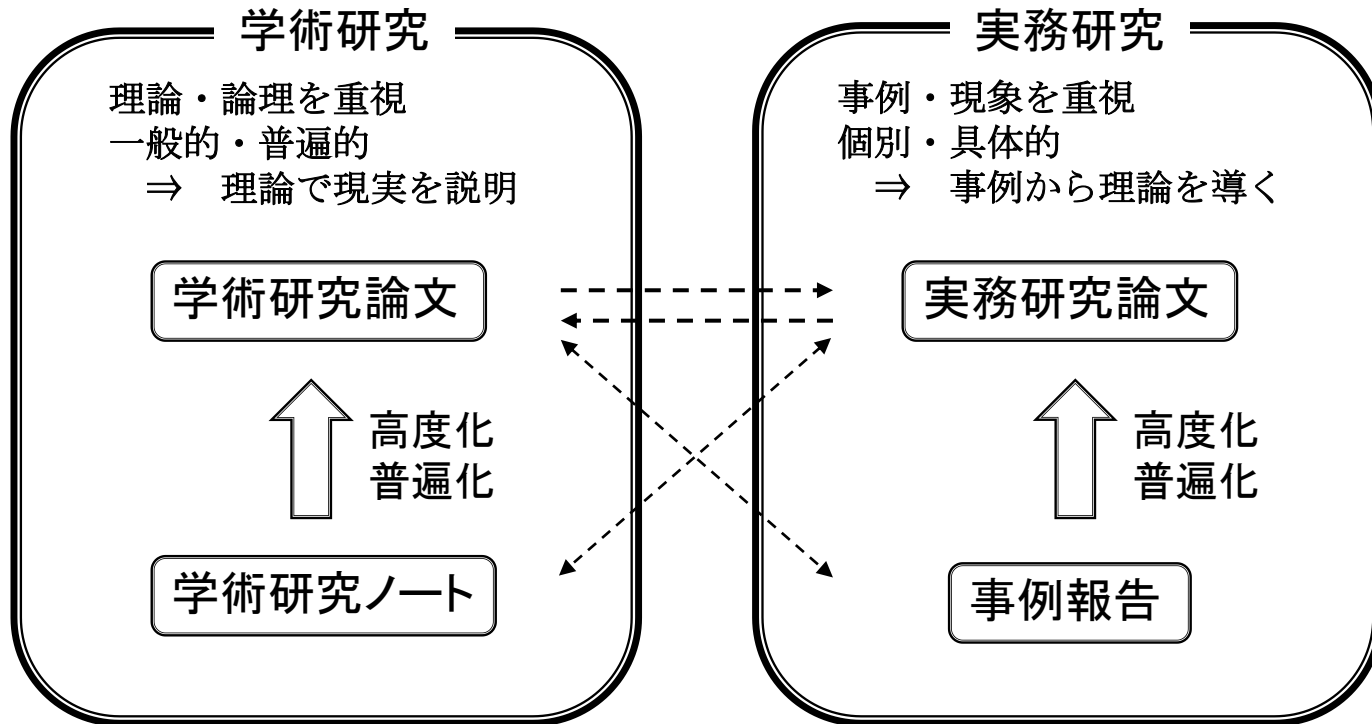
学術研究の萌芽段階や研究の途中段階における研究成果が対象で、将来的に学術研究論文への発展が期待されるもの。

学術研究論文とするには時間がかかる場合や、萌芽段階での顕著な知見が得られ、早期の公表が望ましいと判断する場合等は、本区分に投稿されることを薦める。



# 実務研究と学術研究

## 投稿区分間の関係



実務研究の成果を学術研究に発展 ⇒ 実務知からの帰納  
学術研究の知見を実務研究に活用 ⇒ 学術知による演繹

# 実務研究論文の「題材」と「構成」

- 実務研究論文を書く狙い(題材)
  - 実際に行われている取り組みや対策の紹介・記録  
c.f. 地域特性を活かした事例、新たな住民参加の手法 etc.
  - 実際に行われている取り組みや対策の分析・検証  
c.f. ステークホルダーの分析、取り組みの効果検証 etc.
  - 過去の取り組みや対策の評価・検証  
c.f. 取り組みの影響を計る、同様の取り組みとの比較 etc.
  - 他事例や実務者への実践報告、取り組み経緯や結果の紹介  
c.f. どのように考えて実行したかを記述(報告・紹介) etc.

# 実務研究論文の「題材」と「構成」

- 実務研究論文に何を書くか（構成）
  - 背景：地域紹介・特徴、問題・課題、自身の立場・関係  
c.f. 地域特有の問題、複雑な利害関係、歴史と伝統 etc.
  - 課題等を認知した経緯、取り組みを始める動機、目標・目的  
c.f. 課題選択の理由、取り組むメリット、実現したい姿 etc.
  - 解決手法、関係者、組織体制、ステークホルダー、成果指標  
c.f. 取り組み主体は誰か、参加者と主導者、判断手法 etc.
  - 効果や影響、メリットやインパクト、結果とその後の展開  
c.f. 結果はどうなったか、効果はあったか、継続したか etc.

# 「題材」と「構成」は査読のポイント

- ・ 査読のポイントは、必要な情報が論理的に書かれているか

実務研究論文の査読のポイント(査読審査ガイドライン)

- ① 主旨の適合性
- ② 課題と目的
- ③ 実現(解決)手段
- ④ 実行プロセス
- ⑤ 結果・成果
- ⑥ 分析・考察
- ⑦ 社会的・実務的効果と有用性
- ⑧ 政策的インプリケーション

## ① 主旨の適合性

論文等の主たる内容が「地域活性研究」の研究領域に関して、学術的あるいは実用的もしくは政策的な見地から、どのような関連性を有しているかについて明確に示されているかどうかをいう。

(査読審査ガイドライン)

## ② 課題と目的

論文等が扱う題材、又は取り組みを行う課題、及び研究の目的について明確に示されているかどうかをいう。研究の背景や動機等、論文の意義や位置づけについての理解にとって不可欠な内容が含まれているかどうかをいう。

(査読審査ガイドライン)

### ③ 実現(解決)手段

課題解決や目的達成等のために行った取り組みや施策等について、客観的に明瞭かつ詳細に記述されているかどうかをいう。どのような考えや仮定に基づいて取り組みや施策等が考案され、どのような主体者や関係者等が参加しているのか等、研究を実施するための準備や体制等が明確かつ整理されて記述されているかどうかをいう。

(査読審査ガイドライン)

### ④ 実行プロセス

取り組みや施策等の実施に関する詳細かつ明確な説明がなされているかどうかをいい、その手順や方法が読み手にもわかるように記述され、読み手がその手順や方法を誤解や錯誤なく再現でき、正しく検証可能なように記述されているかどうかをいう。

(査読審査ガイドライン)

## ⑤ 結果・成果

取り組みや施策等の実施によって、課題がどの程度解決されたのか、目的がどの程度達成されたのか、地域社会にどのような変化が生じたのかについて、整理されて記述されているかどうかをいう。

(査読審査ガイドライン)

## ⑥ 分析・考察

取り組みや施策等の実施によって得られた知見やデータのことをいう。研究の目的に沿った形式で記述されることが望ましく、課題解決のための手法、得られたデータの開示並びに分析結果、目的達成のために必要な対応策や実施体制等の多様な形式が考えられ、読み手が研究によって得られた知見を理解し、検証し、活用するために十分な情報が記述されているかどうかをいう。

(査読審査ガイドライン)

## ⑦ 社会的・実務的効果と有用性

取り組みや施策等を実施した結果や成果が、実社会や実使用等の場において、現実的にどのように役立つのか、又は役立つと考えられるのかについて開示され、説明されているかどうかをいう。社会的・実務的効果は、研究のよって得られた知見等を適用することで現実的に現れる変化又は変化の可能性のことであり、有用性とはその変化がもたらす、又はもたらしうる望ましい効果のことである。これらが、読者に明示され、利活用可能な形で開示されているかどうかをいう。

(査読審査ガイドライン)

## ⑧ 政策的インプリケーション

論文等の内容が地域活性化に関する学術的あるいは実用的もしくは政策的な見地から、重要な知見を提供していて実務に取り入れられる価値があり有用であると認められることをいう。

(査読審査ガイドライン)



# 学術研究論文との違い

## ○ 「学術」と「課題」: 研究動機の違い

学術研究論文では、研究(論文執筆)の主たる動機が学術的な新たな知識の発表(公表)になることが多いです。しかし、実務研究論文では、取り組みを始めた動機が実社会での(現実的な)課題や目標等であることが多いです。

これは、実務家は新たな知識の発見よりも、現実の課題を解決し、目標を達成することに重きを置いて活動していることを反映しており、実務研究論文は、そうした実務家に向けた区分としています。

## ○ 「論理」と「手法」: Why or How

学術研究論文は論理的の一貫性を重視し、論理的整合性を問いますが、実務研究論文は、どのようにして取り組みを実現するか、どのように社会で活用するかといった実現手段・方法に重きを置いています。

# 学術研究論文との違い

## ○ 先行研究:「論文」か「事例」か

学術研究論文では、すでに公表・報告された論文等の先行研究は、研究(執筆)の出発点でもあります。実務研究論文では、実社会での先行課題等がそれにあたることが多いです。

先行課題等への取り組み事例は論文等で公表されていないことも多いため、先行事例調査は必須ではありませんが、参考にした取り組み事例や、自身の考えの導出過程等の説明は必要です。

## ○ 「データ」と「プロセス」:「結果」か「過程」か

学術研究論文は取り組みの効果や調査分析の結果等、アウトプットをデータで示すことが求められますが、実務研究論文では、そうしたアウトプットをどのようにして得る(実現する)のかを重視します。また、実現する過程(手段・方法等)のアレンジ(個々の現実に適応させる)も重要です。

# 学術研究論文との違い

## ○ 「理論化」と「実用化」: 主たる関心の違い

学術研究論文は、新しい知識を開示(公表)し、新たな知的創出への寄与が目的ですが、実務研究論文は、自身の試行や考案、取り組み等を開示(公表)し、同様に課題解決や新たな取り組みに挑戦する人に、気づきやヒントを与えることが目的です。

そのため、前者は理論構成を重視し、他の研究成果との整合性や結果・データの厳密性等に重きを置いています。一方後者は、使いやすさ、応用のしやすさを重視し、より課題の捉え方やプロセスに重きをおいたものになっています。

⇒ 学術研究論文と実務研究論文は、異なる視座から実社会(現実)の課題等への取り組みを論じるものです。実社会(現実)に対し、(学術的)知識の形で答えを示すのか、(実務的)手法の形で答えを示すのかの違いです。その「形」の違いは、論文が導く政策的インプリケーションにも反映されています。

# 学術研究ノートと事例報告

学術研究ノートの審査基準は学術研究論文の審査基準を準用し、事例報告は実務研究論文を準用する。

(査読審査ガイドライン)



論文審査項目の全てを適用する(審査する)わけではなく、投稿内容を考慮して必要と判断される査読評価を行う。

## ○ 学術研究ノート

論考の深耕度合いや一般性・普遍性を学術研究論文のレベル程度には求めず、研究萌芽段階にあることを考慮するものとする。

(査読審査ガイドライン)

## ○ 事例報告

個々の事象や取り組み等の詳細な記述を主体に構成されていることを考慮し、研究論文に求められる詳しい分析、考察は求めない。

(査読審査ガイドライン)

# 学術研究ノート/事例報告の位置づけ

## ○ 「論文」へのマイルストーン

研究の途中段階であっても、その時点での成果公表が望ましいと考える場合があります。重要な知見を見出した、取り組み事例を早く知らせるべきだと判断した場合など、先行調査や分析考察が不十分であっても事実関係等の紹介・参照可能性等を重視し、(将来的に執筆する論文の)速報的に書かれます。

## ○ 取り組みや事象の紹介を主眼とする(報告)

実際の取り組み事例やその手法、直接的な効果等について紹介(公表)することを主眼としています、論文としては分析評価や考察等が不十分であっても、知見・情報が共有されることに価値があると判断する場合等に、事実関係等を中心として書かれます。

# ナレッジ・マネジメント

・ 個々人が持つ知識や集団で共有する知識等を包括的に管理運用すること。新たな知識を継続的に創出し、個人と組織の知識を維持発展させていくこと。

\* 1990年代に、野中郁次郎(一橋大学)らによって提唱された。



○ 個々人の知識を集団で活かすには

企業等の社員が持つ知識や経験を、企業全体として管理運用する手法・手段が研究されています。

○ 新しい知識の創出を促進し、集団で共有するには

新しい知識は個々人の創発的活動から生まれます。それを集団内さらには社会全体で共有するための研究が進められています。

# ナレッジ・マネジメントと学会誌

## ○ 知識は常に新陳代謝している

常に新しい知識は創造されており、その創造活動の最たるものが研究活動です。その成果は論文等で公表されます。

## ○ 新しい知識は公表され共有されている

新しい知識は公表・共有されて、次の知識創造へとつながっていきます。その公表・共有の場の最たるものが論文誌(学会)です。



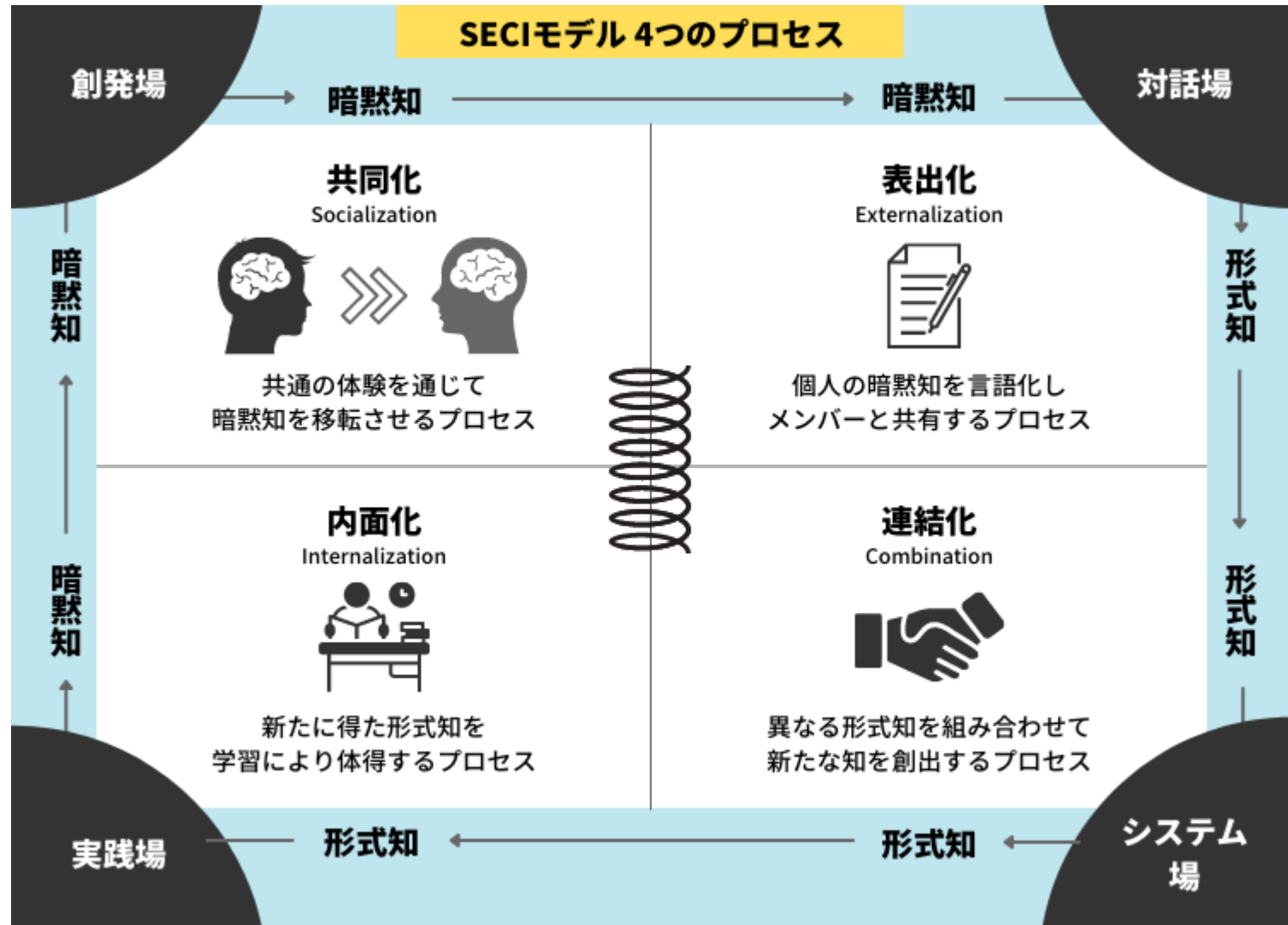
## ○ 知識と論文の関係

論文に書かれ公表された知識 ⇒ 誰もが理解可能＝形式知

論文執筆前の著者が持つ知識 ⇒ 著者だけが理解＝暗黙知

⇒ この形式知と暗黙知の関係を述べたのがSECI理論

# SECIモデル(理論)



ブレインズテクノロジー HPより ([https://www.brains-tech.co.jp/neuron/blog/seci\\_model/](https://www.brains-tech.co.jp/neuron/blog/seci_model/))



## S : Socialization(共同化)

他者の暗黙知を体得＝自身の暗黙知化

⇒ 先進事例に触発され、地域に持ち帰って自ら実行

## E : Externalization(表出化)

体得した暗黙知を、言葉で表現＝形式知化

⇒ 自ら実行した取り組みを整理・分析し、実務論文化

## C : Combination(連結化)

他の知識(形式知)と比較・融合し、新たな知識を創出

⇒ 他の研究(論文)と比較・融合させ、学術論文化

## I : Internalization(内面化)

獲得した形式知を、実用に適した暗黙知として体得

⇒ 新学術知識を社会実装し、実務ノウハウ化(暗黙知化)

共有実務  
ノウハウ

暗黙知

S

E

個別実務  
ノウハウ

実務論文

I 形式知

学術論文

# 実務研究に期待すること

- ・「暗黙知」を集める

個々人に蓄えられた暗黙知(経験知)を共有・発展させるため、個々人が自身の経験知を整理し、他人が理解できる形式知として公表する。

- ・ 新たな「形式知」を導く

形式知化された経験知の共有により、より普遍的で一般化された形式知(学術知)を導出する。

- ・ 新たな「暗黙知」の創出を促す

形式知化された経験知や学術知の実務的活用等により、新たな経験知を創出する。新たな経験知は、将来の政策手法や経済・経営、社会科学分野において様々なノウハウや手法の形で実務者の暗黙知として活用されることが期待される。

# 最後に — 学術研究論文は？

## ○ 学術知識は多様：分野や学会によって異なる

学術知識は多様で、純粹理論のみを扱う分野(学会)から、技術的実践研究を扱う分野(学会)まで様々です。

地域活性学会は実践をベースにした研究活動が主体となるかと思いますが、今回、実務研究論文を導入したことから、学術研究論文は理論主体の構成とすべきというのも一案です。

## ○ 実務との対話は重要&学術的発展の入り口

一方で、学会活動のアウトプットとして地域活性化の具体策の提案、政策課題の解決、社会的・経済的施策の考案等を実現するためには、学術知を実践知に変換する必要があり、実務研究との対話は必須のものとなります。

調査分析等を主体とする学術研究者と、経験や事例に依拠する実務研究者を繋ぐ「知の橋渡し」が重要になるのかもしれませんが。

*Finn*

ご清聴ありがとうございました

nishikawa@pu-hiroshima.ac.jp